

思いやりの心が育まれる力

～ともに学び育ちあうために～

国頭村立くにながみこども園 園長 仲間 美和

1 本園の概要

本園は、国頭村立辺土名保育所、奥間保育所、辺土名幼稚園が統合し、2019年に国頭村立くにながみこども園として開園いたしました。国頭村の豊かな自然に触れ合う体験を中心に捉えて、子どもたちが信頼関係の中で一人一人が大切にされていると実感できることを通して、生まれ育った地域に誇りを持ち、心豊かなたくましく生きる礎を育むことをめざしています。令和7年度は0歳児から5歳児まで148名が在籍しており、約60名の職員が7時15分から19時15分まで様々な勤務時間や形態で勤務している。

2 園の経営

(1) 基本理念

いつも子どもが まんなか 未来の担い手の生きる礎を育むことをめざして

- ・すべての子どもが愛され、心豊かにたくましく生きる礎を育む
- ・すべての子どもの生活と遊びを保証し、学ぶことの礎を育む
- ・すべての子どもの夢と希望の礎を育む

(2) 提供する教育・保育内容

①めざすこども像

- ・健康であいさつのできる子
- ・思いやりのある子
- ・工夫して遊ぶ子
- ・地域や自然と親しむ子
- ・話をよく聞き、自分の考えを伝える子

②めざすこども園像

- ・子どもと保育教諭が、共に学び合い支持的風土に満ちたこども園
- ・保護者・地域と連携し、共に育つこども園
- ・0歳児から15歳までの一貫教育のスタートを担うこども園

③めざす保育教諭像

- ・自ら使命を自覚し、教員の遂行に邁進する保育教諭
- ・子どもの尊厳を重んじ、一人一人に寄り添える保育教諭
- ・専門性の向上と同僚性の構築に向かう保育教諭

3 教育及び保育方針

本園では国頭村教育大綱の「つなぐ・学ぶ・拓く」を基底に捉えて、子どもの主体性を活かした「自然文化交流・感動体験・ことば」などの活動を通して、非認知能力の育成に努め、対話と協同の中で互いに尊重しあう人間関係の基盤づくりを行う。

4 主題設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説には、「友達との関わりを深め、思いやりを持つ。他者の気持ちに共感したり、苦痛を示す相手を慰めたり助けようとしたりする行動は、かなり幼い頃から見られる。ただし、幼い頃は自分と他者の区別ができず、自分にとっていいことは他者にとっていいことと思ってしまうため、直ちに適切な行動をとるようにすることは困難である。他者との様々なやり取りをする中で、自他の気持ちや欲求は異なることが分かるようになっていくにつれて、自分の気持ちとは異なった他者の気持ちを理解した上での共感や思いやりのある行動ができるようになっていく。自己中心的な感情理解ではなく、相手の立場に立って考えられるようになるためには、友達と関わり、感情的な行き違いや自他の欲求の対立というような経験も必要である。」と記されている。

このことから、人と関わる力を育む上では、単にうまく付き合うことを目指すだけではなく、安心して自分のやりたいことに取り組むことにより、友達と過ごす楽しさを味わったり、自分の存在を感じたりして、友達と様々な感情の交流をすることが大切だと考えた。しかし、近年は幼児期の発達に障害の有無に関わらず差が大きく、家庭環境や多様な価値観が原因で生じる困難も多い。

そこで、全ての保育教諭等職員において、個々の園児に対する配慮等の必要性を共通理解するとともに、保育教諭等が園児一人一人を大切にし、寄り添い、取り組んでいる姿を認めたときには一緒に行動しながら励ましたり、集団生活を通して思いやりのある心の育ちができるだろうと考え、本テーマを設定した。

(1) 研究内容と方法

- ①保育教諭等や園児との関わりを持てるように好きな物を探しながら園生活を楽しく過ごせるような関わりの工夫を行う。

- ②園児と一緒に関われる時には気持ちを汲んで代弁し、コミュニケーションの繋ぎ役の関わりを行う。
- ③絵カードを持って園のきまりや危険な事を伝えたり、気持ちを確認しあう関わりを行う。

(2) 実践事例(園児の経過報告)

事例「M・Yさんの入園前～現在までの経過」

年齢(現在)：4歳(4歳児クラス でいご組) 性別：女

疾患名：突発性拡張型心筋症(内服治療中・活動制限なし・水分量制限あり)

入園時期：令和5年10月

支援の理由

- ①クラス等集団に入ることには抵抗がある。(園内の人が多く集まっていない場所では楽しく過ごすことができる。)
- ②音や感覚に過敏性がある。(大きな音や声、帽子をかぶることに抵抗がある。)
- ③発音がみられない。(行きたいところに支援員や保育教諭等の手を引っ張っていったり、表情や音のトーンで表現している。)
- ④言葉の理解が不明。(だめなど言葉で伝わっているように思うが、その他については不明なこともある。)

園での様子

お友達と手をつないだり、年長さんに譲ってもらって楽しんでいます



時々教室で過ごす様子もみられるようになりました。

cブランコやフラフープ、三輪車、滑り台等の外遊びも気持ちよい風を感じながら楽しんでいます



食事はメニューや形態によって苦手なものもあるので、カートに乗ったり廊下等で食べることもあります。

水分量は一日 1000ml+600ml 程度の制限があるため、自宅からもってきてもらった水筒から飲むようにして、量を園と保護者が共有できるようにしています。



	M・Yさん 入園前～現在までの経過			
	日時	目的	参加者	内容
2歳児	令和5年 5月29日	面談	母 担当保健師 教育委員会担当者 園看護師	<ul style="list-style-type: none"> ・病気（経過、通院内容、内服） ・入園までの経緯 ・体調 ・保護者へ連絡すべき症状 ・救急車要請基準 ・酸素 ・現在利用中の福祉サービス、今後の予定 ・活動 ・生活習慣（食事、排泄、睡眠、言語、こだわり） ・母の望む支援の形 ・周囲への伝え方 ・母の就労について
		看護師の 求人 募集 開始		
	令和5年 6月14日			南部医療センター受診に合わせて書類お渡しする <ul style="list-style-type: none"> ・医療的ケアに関する意見書 ・医療的ケアに関する指示書
	令和5年 7月24日	求人への応募なし		<ul style="list-style-type: none"> ・母へ保護者同伴での入園提案 ⇒後日母は母子同時通園考えていないと返答あり
	令和5年 9月11日	見学	保健師から 准看護師の紹介	<ul style="list-style-type: none"> ・週3回（月火金）9～17時勤務可能 ・10月2日～勤務開始 ・10月10日（運動会後）入園予定とする ・母就労開始（子連れ出勤）

令和5年 9月12日	見学	本人 母 担当保健師 園長 園看護師	<ul style="list-style-type: none"> ・内服（昼5種類あり） ・体調 ・保護者へ連絡すべき症状 ・酸素（使用していないので、返却するかもしれない） ・現在利用している福祉サービス（入園後は終了予定） ・活動 ・食事（飲水制限あり 1200ml+200ml） ・睡眠 ・コミュニケーション ・様子（今日の園見学時の本人の様子、好きなもの）
令和5年 9月19日	体験	本人 母 入る予定のクラス 園看護師	<ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣（食事、排泄） ・様子（園体験時の本人とクラスの園児の様子） ・昨日の受診内容（酸素返却の方向、水分制限は今後の様子で量調整となる可能性あり）
令和5年 9月26日	体験	本人 母 入る予定のクラス 園看護師	<ul style="list-style-type: none"> ・食事 ・様子（園体験時の本人とクラスの園児の様子）
令和5年 10月3日	面談	本人 母 担任	<ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣（食事、排泄、言葉の理解 ・自閉症の可能性（ルーティーン、パニック、大声） ・慣らし保育の予定
令和5年 10月10日	入園		登園日 週3回（月・火・金）登園時間 8:30~16:30
令和5年 12月19日	担当 看護師変 更		登園日 週3回（月・水・金）登園時間 8:30~16:30

3 歳 児	令和6年 8月29日	登園 日変 更		2週間に1回週4回（月・水・木・金）登園 時間 8:30~16:30 母通院のため（隔週木曜日）
3 歳 児	令和6年 9月26日	登園 日変 更		毎週4回（月・水・木・金）登園時間 登園 時間 8:30~16:30 母体調不良のため
4 歳 児	令和7年 4月1日	登園日変更		担当看護師から支援員に変更 登園時間 9:00~16:30 毎週5回（月～金） 支援員週5日勤務のため
	令和7年 4月17日	言語 訓練 開始		毎週1回（木） 保護者が言語訓練へ送迎⇒11時すぎ送迎車 で園に登園

（3）成果と今後の課題

- ①入園前より保護者や関係機関との密な話し合いを設けることで、入園の準備が整い安心して受け入れることができた。今後も本児の発達段階を踏まえた話し合いを大切にしていきたい。
- ②クラスの子や他の園児の、「〇〇ちゃん、おはよう」「いっしょにあそぶ」「〇〇ちゃんの好きなミッキーあったよ」「〇〇ちゃん、暑くないかな」等優しく声を掛け、触れ合う姿が多く思いやりや優しさが溢れていた。
- ③全保育教諭や職員間での共通理解のもと、本児も安心した環境で過ごせることができた。これからも、こども達の多様性を受け入れるには、まず職員同士の関係を大切にすること。職員間の意識の「壁」を取り払い、同じねらいや理解のもと、全ての大人が全ての子どもを教育・保育をすることです、継続していくために、運営面の仕組みをつくり、働く環境を整える必要がある。さらに職員が学び続けることで、教育・保育の質も向上し、一人一人の子どもとじっくり向き合えるように今後も研修などを含め全職員で学んでいきたい。